



「蛇の知恵」に  
学んで前進しよう



絵・神門やす子

’13 年頭にあたって

本会代表 岩井 忠熊

昨年末の総選挙の結果には正直いささか落胆した。自民党294議席の圧勝。安倍総裁はすぐさま経団連幹部と懇談、新安倍首相は1月に米オバマ大統領を訪問の予定。これで憲法改悪の動きは加速し、沖縄の普天間基地問題・オスプレイ配備は現状通り。消費税上げても賃上げは1%もなし云々。「奢れる者久しからず」平家物語の名言を悪態がわりに、うさばらしの酒でものむか。しかしそれでは折角のおめでたい正月がわびしいではないか。

人間の営為は直進できない。ある哲学者は「歴史は螺旋状に進む」といった。うまい言い方である。目前の出来事に一喜一憂ばかりしてはいけない。私たちがいま螺旋のどこにいるかを確認すべきだ。そのためには過去・現在・未来を見通す「哲学」が必要である。

今年はい年だ。好きではないが、蛇のあゆみを見るとS字状に進み、直進しない。なめくじが進む時には一度身をちぢめ、それから全身をのぼす。気味の悪い生き物の話で恐縮だが、いまの私たちに、口あたりのいい話だけでは心にひびかない。

わが京都の民主運動史を語る会の「燎原」も204号になった。歴史の勉強は蛇行の連続である。失敗も前進もさげられない。そして「継続は力」もまた真理である。たゆみなく歴史の真実を掘り、そこから教訓と真理を求めよう。

9月例会講演 戦前と戦後の民主主義 京都の民主運動・学生運動を中心に (続)	岩井 忠熊	2
11月例会 私の蝮川虎三論 伊藤晃さんが報告	井上 史	3
能勢克男と『土曜日』(下) 受け継がれる、協同の魂	湯浅 俊彦	4
連載「京都民報」私史(2)	井上 史	7
私の一期一会(4) 西口のぞみさんに聞く(下)	佐藤 和夫	8
連載 彼らを通すな―立命館「大学紛争」の中の青春―(10)	鈴木 元	10
悼 女性解放ひとすじに生きた 西垣昭子さんを偲ぶ(下)	井上 とし	13
BOOK 左京の「住民運動の記録」2冊 市原野ごみ問題／半鐘山		14
会員消息／1月例会案内／情報スクラップ／編集後記		15





11月例会

## 私の蜷川虎三論 伊藤晃さんが報告

### 「解同」問題で共・社に亀裂

11月29日午後、東山いきいきセンターで開かれた11月例会では、伊藤晃氏（自治体問題研究者）が「私の蜷川虎三論」と題して、28年間続いた革新府政と、素顔の蜷川知事について語りました。

蜷川初登庁を府職員として迎え、府職労役員として何度も深夜に及ぶ団交で対峙、のち共産党府議団事務局長になり、知事室や自宅で教えてもらった「恩師」の一人だった。

蜷川氏の人事掌握術は、部長クラ

史』は名著だと私は思っている。実際、戦時下、京大医学部の学生が取り組んだ結核の研究は風早さんの著作に負うところが大きい。かつ、これらの研究に関わっては、転向を表明した人々の働く場にもなった。私は、この一連の研究の否定的な考えには与しないし、抵抗運動としても評価されていいと考える。

### 15年戦争下、滝川事件以後の京大学生運動

『療原』（167号、170〜173号）「滝川事件以降 15年戦争期京大学生運動の断章」で述べられた内容

- を簡潔に紹介、報告されましたので、当日のレジュメの項目のみを下記に記しておきます。
- 1、滝川事件（1933年） 学内左翼組織皆無／一般学生と左翼の学生の連合／共青の役割（6月検査）
- 2、高代会議と学生大会 民主的運営／スパイの入る余地なし／二六会（高代会議活動家）／中井正一「委員会の論理」
- 3、学生運動の大衆化 学友会ポイコットより改革へ／研究会活動の活性化／37年二六会講演会朝日会館ホール
- 4、京大ケルンの活動 機関紙をつくら
- ない／党的組織をつくらない／学内運動指導／日本共産主義者団の接近
- 5、戦時下学生の運動 関係者の戦後の活動／ジャーナリズム／政界／教育（学術）医療等
- 6、残された問題 多数派と袴田／コミンテルン（野坂） 批判で解体・統一／関西地方委Ⅱ中央奪還委活動弾圧／1935・4・7京大罅淵清虎（多数派活動家）西陣署で虐殺／津司市太郎・田中義男の活動／特高主任懲役2年猶予2年

なお、残された課題については、前号でも紹介していますので参照下さい。（文責・井手幸喜）

スの一新（中小企業庁から二人を起用）、小川貢公室長（元特高）や京都大学の教え子7人の選任、部長会議の刷新（蜷川ゼミの再現）、教育委員会の重視（「西の文部省」と呼ばれた）、公安委員長に湯浅祐一（湯浅電池社長）選任などであった。

あまり語られてないが部溶解放同盟との関係がある。1972年12月府議会で、国府泰造ら解同朝田派が「入札に相談がなかったのは差別だ」と府幹部を長時間拘束し、議会では共産党以外の賛成で知事問責決議が可決された。社会党主流が反共・反

蜷川へ傾斜するきっかけとなった。蜷川は河上肇の論文に感動して京大に来たが、戦時下、「決戦の春」を大学新聞に書くなど自らの思想的立場から遊離した言動を強いられた。だからこそ戦後「憲法を守る」強い決意で臨み、28年間この旗印を掲げ続けた。しかし、一方で天皇制美化を買いたという面もあった。

蜷川の最大の失敗は、後継者問題が常に纏い付いた。農林部長だった浜田正と副知事を務めた山田芳治はその典型だった。蜷川は私に「なかなか後が続かないね」と呟いたことがあった。（詳細なレジュメを用意されています。いづれ誌上で紹介したいと思います。編集部）

# 能勢克男と『土曜日』

《下》

受け継がれる『協同』の魂

井上 史 (編集者)

## 1 前稿のおさらい

戦時下、京都で反ファシズム文化運動を展開した『土曜日』編輯人の一人、能勢克男(1894-1979)は、1947年に『土曜日』——これを第2次と呼ぶ——を發行、さらに60年代に雑誌形態の第3次『土曜日』を編集發行していました。

前稿(203号所収)では、第1次『土曜日』の歴史として、京都家庭消費組合(京都生協の戦前版といえる。以下、家消と略する)の創立と弾圧があったこと。家消の実践した「家庭(ホーム)の協同一致」や多彩な活動は、消費経済活動だけでなく、生活、家庭を巡る領域を社会組織化したこと。家消と同時期に創刊された『母性愛』(1930年6月-38年3月)を参照することで、ホームの組織化の問題が、当時の天皇制家族国家観と抵触することを確認しました。敗戦後の第2次『土曜日』では、新憲法下で、新時代の家庭観

を築こうと迷い、揺れる女性像を紹介しました。1920年代、30年代の、日本の市民社会が未成熟な時代に史的唯物論を学び、実践しようとした能勢世代にとって、家庭(ホーム)の問題は、深く、重い課題であり続けました。この稿では、戦後の第3次『土曜日』と能勢の歩みを紹介します。

## 2 『しんぶん世間』と『ゆらぎ』の挑戦

第3次『土曜日』を紹介する前に確認しておきたい資料が二つあります。

第2次『土曜日』から6年後の1953年、能勢は石川湧(フランス文学者)、木俣秋水(元京都市会議長)らとともにタブロイド判『しんぶん世間』を發行しました。「この新聞は特定の思想にしばられたものではない」、「自由党でも共産党でも、アメリカ側でもソ連側でもかまわぬ」、「正義と人道——これがわれわれの、いわば最低綱領である」と

の主張を読めば、同人の顔ぶれと、「逆コース」下に人民の声を汲み取るうとした編集意図が理解できます。同紙の紙面づくりが、第1次『土曜日』を做っていることも見落とせません。しかし、松川事件の二審(能勢も弁護団に参加)、旭丘中学事件、京都破防法公判(弁護人は能勢、小林為太郎)、内灘闘争、スターリンの死去、吉田内閣の「バカヤロー解散」など騒然とするなか、『しんぶん世間』は4カ月に6号を出して幕を閉じました(注①)。

この時期、能勢は「京都多喜二・百



同志社大学人文研に寄贈された第3次『土曜日』

合子友の会」(1955年1月準備会発足。東京・仙台・大阪の会と連携)に参加し、『ゆらぎ』という機関誌に戦前、『土曜日』時代の回顧を数編発表しています。明治以来、権力者の都合で行われる暴力に対して、政治は、法律家は、文学は、人民は何をやっていたのか、いるのか、という憤りと自己の来し方をも含めた後ろめたさ、苛立ちを交ぜにした心情が、どの文章にもにじんでいます。講和条約後の「右旋回」や、いわゆる「50年問題」のなかで、弁護士として生涯でもっとも多忙な時期(注②)に、小さくても、さまざまなチャネルを駆使し抵抗の手を上げようと奮い立たせているのは、京都家庭消費組合以来ともに歩み、1952年5月に急死した同志・中井正一への哀悼の慟哭だったのかもしれない。

## 3 第3次『土曜日』から協同組合へ

第3次『土曜日』は1959年8月15日、能勢の自宅に置いた「土曜日の会」を發行所として創刊されました。月刊雑誌形態の誌面には、能勢、住谷悦治ら第1次『土曜日』『世界文化』関係者による時事評論。赤石茂、立野正一らプロレタリア文化運動関係者の随想、映画評。会員名簿には、羽仁五郎、栗原佑、大塚有章の名前もあります。第1次、第2



1960年頃の能勢サロンの様子。右から能勢、能勢清子、伊谷千代子、住谷よし江、住谷悦治、伊谷賢蔵、藤井好文、豊田工。

次との大きな違いは、女性執筆者の多さですが、そのプロフィールが不明の方も多く、今後の課題です。

雑誌発行の背景として、60年安保闘争の高揚と鎮静、松川事件仙台地裁の無罪（1961年8月8日）、そして大逆事件再審請求の活動を忘れるわけにはいきません。大逆事件大審院判決から50年経った1960

年、事件で有罪となった唯一の生存者・坂本清馬らを請求人に「大逆事件の真実を明らかにする会」が発足し、能勢も弁護団に参加。坂本とふたり並んだ写真や会代表をつとめた荒畑寒村の色紙が残されています。能勢は、京都家庭消費組合時代の体験と、1938年人民戦線事件で検挙されたことを関連づけながら

大逆事件の全体像を把握しようとしていまし

た。さらに、明治、大正の日本の司法官が、司法の廉潔と独立

について忠誠と誇りを持っていたはずと確信しながら、昭和期にそれが「自壊」した背景に眼を

向けます。そこには、司法官だった父・萬や義父・国分三亥の姿がありま

した。第3次『土曜日』は、憲法に保障された思想、言論の自由を守るために努力するという会

則を掲げて、会員は自由に、なんでも投稿可能と呼びかけましたが、原稿集めには苦勞し、能勢はいくつものペンネームで穴埋めし、他雑誌からも転載、独自の広告記事を制作するなど、いわば雑文の寄せ集め。その編集方針に「世話人（能勢のこと——井上注）は錯覚しているのではないか。このままでは心細い」とい

う和田洋一の批判と心配は的中しました。創刊2年目、池田内閣の高度経済成長政策の頭打ち感が漂う頃、人々の関心は政治から経済へと移っていました。その転換こそが実は政治的な意味だったはずですが。

1963年5月の第23号が最終号。能勢は、「戦争まえの『暗い』時代のことである。私たちは1929年らしい京都消費組合をやっていた」と書き出し、当時組合で働いていた朝鮮の青年たちのその後について書いています。

これと同じ趣旨の文章が、創立直後の京都洛北生活協同組合の機関誌『洛北』第2号（1963年9月1日号）の巻頭言として掲載されています。

1963年といえば、京都地区の大学生協陣営が京都洛北生協設立への活動を本格化していた時期です。この頃からの生協運動のリーダーである、元京都生協理事長の横関武さん、ならコープ相談役の稲川和夫さんのお話によると、地域市民生協の

設立と京都府生協連合会の再建を力説し、「戦後京都における統一戦線を可能にしたのは、戦前の消費組合運動があったから」と強調していたのは能勢だったとのこと。この方針のもとに、洛北生協設立へ歩みだす前の能勢の呼びかけ文が残っています。

「私どもの京都で勤労市民、学生の連合体として消費組合がけなげな運動を続けていて一時は『運動のメッカ』といわれたのも今では、30年前の昔となりました。戦争はそれを根底からたたき壊し、私どもはあのファシズムにはまったく叩きのめされたことを認めざるをえません。そして戦後、もう一度立ち直る元気が今日までどうしても出てこなかったのでございます。

しかし、学生諸君の生協は、戦後新しいエネルギーをもって、戦前には見なかったすばらしい発展をとげ、その規模において、また経営、組織の方法、技術において、まったくそれは『近代的』というほかない盛況を示しております。そこで、彼らは、『今度こそ、われわれが市民組合の組合作りにお手伝いする順番だ』と張り切っています。（中略）思い起こす昔、自分たちの生活の根に、未来に対する希望をかけたのは、果たして夢想に過ぎなかったのでしょうか。私はそうでないとも、そうだとはいえ切れぬ迷いのなかにおりま

す。しかし、機運は再びおとずれてきたのではないだろうか。」

第3次『土曜日』の直後に京都洛北生協が誕生した、能勢が理事長に就任したという生協運動史との関連だけで、『土曜日』の系譜を説明できるとは思っていません。60年代の大学と大学生協がおかれていた政治的情况、その後の「1968年」問題を視野に入れて検証する必要もあるでしょう。『デルタからの出発——生協運動の先駆者 能勢克男——』（かもがわ出版、1989年）に掲載された自伝的回顧録「戦前生協運動の思い出」は、同志社生協組織部発行の『生協研究』に63年から65年にかけて連載されたものですが、ただ単に大学生協から地域市民の生協を誕生させることだけを考え、支援をしたのではないように思います。

先と呼びかけ文には、1930年代の京都家消の体験を想起しながら、理想としたホームの協同一致や家族・家庭モデルを基礎とした運動については、ひとことの言及もありません。女性だから家族の問題だという短絡的考えは、この際きっぱりと否定しておきますが、しかし、日本の生協運動、消費者運動において地域の女性の参加、組織がいかにおきな力を発揮したか、ここであらためて強調するまでもないでしょう。60年代初頭、女性運動の全国的な単一組織の形成に関心が注がれていたことも配慮する必要があります。60年安保運動以後の市民社会は、近代家族モデルが転換期を迎えていたことと密接につながっています。能勢はそのことを意識しています。下鴨の自宅は、彼の理想とする家庭、地域、社会、集団の実験サロン<sup>①</sup>でした。

#### 4 パラダイムを超えて

「昭和初期の日本におけるマルクス主義革命運動は日本封建主義家族観を曳きずってきた。男子偏重、男子専断、専行主義に凝り固まって、それを少しも反省しようとも、批判しようともしないうた。ひどいになると、女郎とハウスキーパーのあいだを往来することも出来た。（中略）われわれ旧友のメンバアは、多かれ少なかれその波瀾狂濤の内を潜りぬけて育って来たのではなからうか。」

結……ここでいう家族とは、すでに単なる血縁親族でなく、親しい仲間、同志的組合を含む「Genossenschaft（ゲノッセンシャフト）」と呼ぶべきかもしれません（注③）。家庭消費組合以来、前稿で紹介した『母性愛』、第1次『土曜日』から第2次、第3次『土曜日』、そして協同組合へという歩みとこの文章を重ねようとすれば、話を作り過ぎとの誹りを受けるでしょうか。

能勢克男さんという人の84年の生涯には、ホームの変化、近代家族モデルの成立と転換期が重なります。亡くなった1979年はまさにさまざまなパラダイムの転換期でした。彼がこだわり続けた家族・集団、社会の理想は、生活協同組合と、たとえば「京都の市電を守る会」（1971年〜78年）などのように、後続世代に引き継がれ、その後もダイナミックに変化し続けて今に受け継がれています。先の「運動の歴史を編みたい」という夢は、没後「京都の民主運動史を語る会」に結実したことを申し添えて、筆を擱きます。

#### 補足

本稿では能勢が第1次『土曜日』に何を書いたか？ という説明には至りませんでした。今日では、彼の執筆記事は特定されていますので、『能勢克男における「協同」』（同志社大学人文研・大学生協研究会、

2012年7月の講演録&『土曜日』をめぐる座談会』を収録）を参照してください。ご希望の方にはお送りしています。第1次『土曜日』は、『復刻版 土曜日』（三書房、1974年）で読むことができます。絶版になっていきますので、古書店に注文するか、図書館で。第2次『土曜日』、『しんぶん世間』は同志社大学人文科学研究所に所蔵。第3次『土曜日』は京都府立総合資料館に、『母性愛』は京都府立医科大学図書館に所蔵されています。閲覧には所定の手続きが必要です。

本稿のために、岩井忠熊先生、京都の大学生協史編纂委員会、また『能勢克男における「協同」』で講演してくださった藤井さん、佐藤さん、雨宮さん、そして参加の皆様にも多くのご教示をいただきました。感謝します。（文中、敬称略）

#### (注)

- ① 『しんぶん世間』第6号（1953年4月1日）に終刊号との記述はない。
- ② 法廷闘争の理論と実際について講演録を詳述した『法律における抵抗』（三到社）をまとめたのも53年のこと。
- ③ 能勢が1920年代にオットー・ギールケの団体法を理想的に享受していたことについては、藤井祐介「能勢克男の協同組合思想」、佐藤洋「能勢克男の民芸的映画館—その表現論について」に詳しい。ともに『京都の大学生協史編纂委員会報』第22号（2012年6月）所収。

# 「京都民報」私史

2

湯浅俊彦

日本共産党は都道府県委員会が指導する新聞を「地方政治新聞」とよび、地区や支部の発行するものを「地域新聞」としていた。一般に「〇〇民報」と名付けられているものが多いが、これは1945年12月、松本重治、長島又男ら旧同盟通信社の幹部が創刊した「民報」(のち「東京民報」と改題、48年11月廃刊)のリベラル左派紙に源があるのかもしれない。もっとも「福島民報」など一般地方紙にも「民報」は使われている。

## 70年知事選で読者2倍半に

69年3月の共産党府党会議で私は民報編集長として准府委員に選出された。32歳だった。この頃、民報を直接指導していたのは田中弘常任委員(機関紙・財政部長)だったと記憶するが、66年に府職員を退職し共産党府委に来た山本満雄氏(教育文化部長)も評論や政策論文を次々民報に執筆していた。

さて「京都民報」は1969年12月から月1回4ページに、そして70年12月から毎月4ページ建てとなった。大きくなった紙面を広げる女性の写真をポスターにして宣伝した。モデルは共産党府委員会の受付にいた1さん。(写真)

70年知事選を通じて1年間で部数は2倍半に増え、経営的にも安定してきた。

は一段とハードになった。

「赤旗」が1971年1月13日、14日付で「発行12年の京都民報―地方政治新聞の活動」と題する座談会を掲載している。梅田勝副委員長、田中弘選挙自治体責任者、吉村久美子府議、松村茂京都民報副責任者らと党中央の宣伝部から箕浦二三氏が出席、司会は若宮修市議が行っている(61年創刊だから発行12年は間違いない)。ちなみに私は公務員のため名前を出していない。

## 「住民の機関紙」として発展

「京都府の民主的新聞として広い層の人びとから好評をほくしている京都民報の経験を全国に紹介したい」と箕浦氏が開会あいさつ、「地元の記事が魅力、正確な報道で権威高まる」の見出しで参加者から70年知事選で果たした民報の役割や府市議会報道など具体的な「魅力」が語られている。

座談会の(下)では「三紙一体の拡大運動、集金・配達の確立で持続」と、「赤旗」日刊紙と日曜版とのセットで民報読者を増やしている経験が出席した居住支部や経営支部の代表から出されている。

これ以後、中央から聞いたと、各県

だからこそ4ページ建ては実現した。しかし、編集体制は記者一人と学生アルバイト一人が増えただけで仕事



の「民報」担当者が次々見学に訪れるようになった。地方政治新聞の具体的な

な方針は党中央にもなく、いわば先進県として勧めたようだ。

### 文化欄の充実と多彩な連載

増ページで第4面はほぼ文化欄として定着した。連載でも「京都の民謡」(採譜と文・日本音楽研究会・29回)、「新丹後風土記」(八木康敬・17回)、「走れ、チンチン電車」(吉松昭史・15回)、「文学碑めぐり」(奥田雀草・15回)などが紙面を飾り、中でも69年11月から53回続いた「物語・京都の自由民権運動」は原田久美子さん(当時府立総合資料館職員)のライフワークで貴重な論考となった。この連載を図書館で閲覧する学

生・研究者も多かった。

一方、社会問題でも先駆的な報道と連載でキャンペーンを張った。「大学―たたかいの中から」(6回)、「府下の公害を追う」(10回)、「公害許すまじ―たたかう府下の住民」(10回)、「京都の自衛隊―その実態をさぐる」(8回)など、ときどきの運動を激励・鼓舞した。それがまた読者拡大に結びついた。

71年5月2日、創刊10周年を迎え記念号を8ページで発行した。1面は「共産党、後半戦でも躍進」「共産党が議員数第一位」の見出しが躍り、一斉地方選の前半戦で府会12、京都市会18議席の大躍進に続く勝利を伝えている。

6面の10周年特集では、「いっそう庶民に愛され、親しまれ、科学的な住民の機関紙としてさらに発展を」(蛭川虎三知事)、「府市議選勝利を伝える紙面は圧巻で、躍進の10年を象徴するもの」(上田耕一郎「赤旗」編集局長)など11氏からのメッセージが掲載されている。堀江友広府市民団体協議会会長は「もともと市民の新聞であり、市民との密着度は素晴らしい」と讚える。

市川白弦花園大学教授は「貴紙を通じて、私の第二のふるさと京都について教えられる」と寄せているが、著名な宗教学者である同氏は毎月のように民報に時評を寄稿された。こうした民報ファンが府民の中に次第に広がっていた。

文化欄の充実には松村茂社長長の存在が大きかった。「民報の魅力は文化欄」と語る人が多く、それが読者拡大の力となったことは間違いない。(以下次号)

# 私の一期一会 西口のぞみさんに聞く (下)

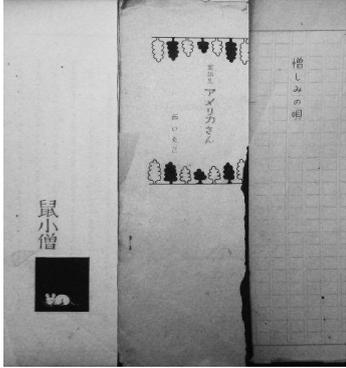
聞き手・文責 佐藤和夫 (本会世話人)

遺品から1945年前後の2冊

——今回の聞き取りのサブプライズです。西口克己さんの初期未発表作品が遺品のなかから発見されました。

手書きで表紙も自分で装丁しているわ。丁寧に書くときはいつも左手で書いていたわ。表題は、「憎しみの唄」と「寓話集 アメリカさんの二編」。

——始めの方は「かぶと虫の唄」「夜の唄」「赤ん坊の唄」「戸籍吏の唄」「ふたたび赤ん坊の唄」「夕やけの唄」「雀の唄」「いい子の唄」「わるい子の唄」「中学生の唄」となっていますが、いつ頃書かれたもの



発見された手作りの2冊と「鼠小僧」のイラスト

でしょうか。しかも、唄づくしを統括する表題は「憎しみの唄」となっています。トーンは暗いですね。

たぶん、両方とも清書した時期は戦後のようだけど、「憎しみの唄」の中に「赤ん坊の唄」と「ふたたび赤ん坊の唄」と「戸籍吏の唄」があるから、長女の生まれた1944年前後にかかれたものかもね。

——「かぶと虫の唄」の冒頭、俺は殺されるかもしれない／巨きなふしぎなからくりの中へ／いやおうなしに叩き込まれて、というのは、治安維持法での検挙や徴兵に対する恐怖をかぶと虫の運命に暗喩していますね。そうね。

——「夜の唄」では、もうすこしきわどいですね。

。夜は暗いのだ／やみの中でおまへらは眠らねばならないのだ／眠くとも眠くなくとも眠らねばならないのだ／締められながらうごめきながら／眠りつけねばならないのだ／

二千六百年の昔から／あの恐るべき峯を下りてこのかた／草も木もなききふしてよりこのかた／恐るべき昔から この森のなかは暗いのだ／果てしれず底知れず暗いのだ／おお／雲にぞびゆる峯の上に恐るべき一人を残して！

天皇制批判はよみとれるけど、その当時、実践活動に踏み出す勇氣までは、どうかしら。

## 『大いなる幻影』と山下文男氏

——この暗喩という逃げ道も特高に通用したかどうかはありますが、天皇制絶対主義下の自由の抑圧と生まれてくる子らもとりこむ「巨きなしかけ」を告発しています。後



左=長男光、右=のぞみ (1985年)

に、「明治憲法私論 大いなる幻影」(1982年4月、新日本出版刊)に「つながるんじゃないですか。」

でも、あれは読んでも面白くないでしょ。西口の小説を出した出版社みんなことわったのよ。当時の日本共産党出版局長山下文男さんが、新日本出版社編集長の劇作家・津田孝さんにつないでくれたわ。ご存じ、津波史研究家でもあった山下さんを。2011年の正月に、岩手県大船渡市から年賀状をいただいていたわ。自然災害の著書をスパーでチャリテイ頒布会をしていると書いてあったわ。なんでも、慢性呼吸不全で歩行もままならず入院するとかおっしゃってたけど。

——知るも知らぬも、『津波でんでんこ』の山下さんでしょ。1985年、大阪であった赤旗まつりの書籍コーナーで西口さんがサインセールしたときに私もお会いしました。

2011年3月11日、岩手県陸前高田市の県立高田病院の4階に入院していて津波被害にあったそうよ。同年の3月27日しんぶん赤旗や朝日新聞などの記事で見たわ。病院は海から1キロ以上離れていて、病室は4階。「まさか此処までは」と思い、「津波研究者として見届けたい」と窓から見下ろしていたら波しぶきが窓ガラスを破ってベッドごと流され、カーテンに捕まり流されずに救助されたそうよ。九死に一生。

## 今年、西口生誕100年 発見された初期未発表作品

## 改憲の動きに立ち向かい絶筆

——まさに、そうした津波史を体験することになった山下さんの尽力をえて出版された『大いなる幻影』で著者西口克己さんのあとがきを讀むと、執筆の動機が書いてあります。『私は今年69歳になる。「熟年」とやらをカサにきる気持はさらさらない。だが、この年齢になってふりかえってみると、私には戦時中、民主的な発言を一切封殺されていたという、苦しい出がある。そうさせたのは治安維持法であり、その根底には明治憲法があった。現在、憲法改悪のうごきがある。とくに改悪論者が、ふたたび天皇の「元首化」を企んでいるとみたととき、私は私なりに何かしなければならぬと思った。』

—— そうね。安倍晋三さんの自民党改憲草案にただよきな臭い感じに、西口が生きていたらじつとしていなかったでしょうね。

—— 『私は私なりに』という立場、つまり革命的知識人としての発言する責務ということでしょうね。であれば、「大いなる幻影昭和編」で明治憲法がどう展開し、崩壊していったかを三部作として書き上げるはずでした。「昭和史発掘」の松本清張が西口さんの「大いなる幻影」を書く守備範囲の広さに驚いていたとかいうエピソードも聞きました。



私は校正を兼ねた一番始めの読者。1984年11月から赤旗日曜版で50回連載予定で1985年8月11日まで39回連載され、病気のための休筆となり翌年3月死亡のため未完になったわ。

——さて、話は戻りますが、「寓話集 アメリカさん」は占領下の地方都市の市長や地域ボスのエセ民主主義を告発する三幕物の脚本ですね。アメリカ占領軍にとりいり、民主化を骨抜きにしようとする地域ボスたちが、GHQ指令でドタバタを演じる。演説にもつたいをつける言葉の継ぎ目にいれる「えー」とか「あー」と

かいう間投詞(?)を禁止する条例制定ですったもんだして権威の化けの皮がはがれるという内容です。後年、西口さんが文学と地方政治の革新にとりくむ必然を感じさせます。喜劇そのものですが、この一篇を新劇の勇敢なる闘士、故石川尚の靈前に捧ぐ、となっていますが。

西口の妹さんの配偶者ね。生きていたら演劇人として名を残したかもね。

——この寓話集はB4サイズ・縦25字×12行で74ページ。そのうち、「アメリカさん」は39ページをしめています。「鼠小僧」という一篇は、次郎吉並みの盗みの名人泥棒の話ですが、ネズミのイラストがプロかと思まがう手書きです。

始めの頃は、選挙のポスターも自分でデザインしていたぐらい器用な人だったわ。

## 龍馬が唄った「わらべ歌」も作詞

——枚数の関係で、話は一気に飛びます。一枚の写真があります。1963年4月の西口さんの2期目の当選の写真です(上)。

懐かしいわね。前列中央が西口、左が選挙本部長の湯浅晃(元京都総評議長)さんで右が事務長の藪良雄さん。3列目の右から3人目が青年井ノ口誠二さんよ。

——2列目の右から4人目が井上秀雄(部落問題研究所員・発足当時の当会世話人のひとり)さん。3

列目の右端は小島満彦さん、左から木下さん、建家さんなど労働者グループ。

本当に人生は一期一会だわ。西口の没後1周年で出版された追悼集『西口克己 廓と革命と文学と』(かもがわ出版)に儀我壯一郎(2009年没・大阪市大名誉教授・専修大学教授など歴任)さんは、こころのこもった追悼文をよせていただいたわ。

——中国の魯迅自身が死期を意識して書いた一文を紹介した追悼文ですね。「ヨーロッパ人は死に臨んで、他人の許しを請い、自分も他人を許す」という儀式をよくやる話を思い出した。私の敵はかなり多い方だ。もしも新しがりの男が私にたずねたら、何とこたえようか?(10面に続く)



西口克己さんの出棺式

【連載】

# 彼らを通すな

立命館「大学紛争」のなかの青春

第10回

鈴木元

に冬物の厚く長いオーバーを着ていたのので、髪の毛がチリチリなつたものの衣服は消火剤で真っ白になったが多少焦げた程度にとどまり助かった。

## わだつみ像破壊に全学の怒り

### 卒業式・入学式の自主防衛

学友会は「全共闘」の「卒業式・

入学式粉碎」行動に対して、自主防衛の方針を提起するものの、今後は彼らの暴力は「警察に取り締まらせる」方向の検討の下、挑発に乗らず、角材や鉄パイプの所持をやめ、ヘルメット、軍手こそ着用していたが素手で防衛できる範囲内で行動する方針に転換した。研心館にあった角材や鉄パイプも処分、もしもの防衛用には掃除用のモップだけを用意した。

1969年3月20日に予定されていた全学合同の卒業式は「全共闘」の実力阻止に対応するために20日、21日に分けて学部毎に開催することにされた。3月20日、ヘルメット、鉄パイプで武装した「全共闘」は広小路キャンパスに入り、法学部卒業式の会場である研心館に投石するなどの襲撃を加えたために法学部の卒業式は中止となった。明くる21

日にも文学部事務室に乱入し破壊したために文学部も卒業式が挙行できなかった。

経済、経営、理工、産業社会の四学部と二部の全学部は、妨害があつたものの、二部学友会の呼びかけに応えた防衛学生の力に支えられて実施された。しかし、この卒業式が最後となった末川博総長の「はなむけ」の演説は不可能となり、大学はこれを印刷して全卒業生に贈った。

### 3月28日、火炎瓶で襲われる

深夜、研心館に火炎瓶が投入された。この日、当直であつた私は石油ストーブ横の床に寝ていた。窓ガラスを突き破って投入された一本の火炎瓶が私のすぐ近く落ち大きな炎が上がった。たまたま、私のそばに置いてあつた故三宅誠孝氏が近くに吹き付け助けられた。布団も毛布もないコンクリートの床の上に新聞を敷いて寝ていた。私は寒さしのぎ

### 4月8日、研心館襲撃事件

百万遍の学生会館で寝ていた私に「研心館が暴力学生の奇襲を受け、中にいる者が暴行を受けている」という連絡が入った。

中川会館が封鎖されたことにより、大学本部が臨時的に研心館に移され、一階部分は内側からロッカーを積み上げて防衛していたので校内で「唯一安全な建物」であつた。一階にあつた三カ所の扉は鉄製であり、夜は東南の扉だけ守衛を置いて出入りできるようにしていた。夜中はそれも閉め、二階の窓のところに見張り置き、鉄製の縄梯子を下ろして出入りしていた。

そこから侵入され襲撃されたのである。相手はプロレタリア軍団(黒ヘル)を名乗る約30名の暴力集団で広小路キャンパスヘトラックで乗り付け奇襲したのであつた。短い鉄パイプやチェーンはおろか登山用の大型ナイフ、鳶口などを所持していた。こちらは鉄パイプはおろか角材もなく掃除用のモップしかなかった。彼らは血に飢えたテロリスト化

(9頁からの続き) 私はしばらく考えから、決めたのはこうだった。勝手に恨ませておけ、私の方でも一人だつて許しはしない(『且介亭雑文末編』)。西口さんもまた、死後にいたるまで、天皇制にすらなる菊の花をしりぞけつづけた。

西口の赤旗で覆った棺をゆかりの人々に担いでいただいたわ。死後一年して、西口をしのお機会にそれぞれの思いを忌憚なく語つてと水を向けたら、でるわでるわ悪口が。

「毀誉褒貶相半ばす」より、ちよつとマイナス方向ですか、そんなことないでしょ。儀我さんの「魯迅

中国の革命的知識人」(『中国革命史』所収・1965年法律文化社)では、魯迅を河上肇に比定してますよ。2013年はその西口克己さんの生誕100年にあたります。1993年の生誕80年記念の時、「文殊九助わらべうた」の楽譜が再発見されて披露されました。1958年の五所平之助監督が坂本龍馬と寺田屋お登勢を描いた映画「螢火」を制作したとき、龍馬が風呂の中で唄うわらべうたに使われました。原作者の織田作之助は西口さんの旧制三高の文芸同人仲間ですね。

あのわらべうたは、言い伝えられたものじゃなくて、西口の作詞なのよ。

——へーッ。西口さんは童謡の作詞も器用にしたのですか!

(終)

していた。当日の当直責任者は学友会書記長の穀田恵二君であった。彼が捕まれば、生やさしい暴行で済むわけはなかった。瀕死の重傷にいたるランチに襲われるか、殺される危険があった。何としても速やかに助け出す必要があった。

事実この日の暴力集団は「殺せ」「抵抗すれば殺す」などと叫びながら蛍光灯を次々と破壊し「俺たちは立命館の『全共闘』のように甘くはないぞ」と叫びながら、登山ナイフで切り付け、鉄パイプで殴りかかるなどの暴行を働いた。二部学生のF君はナイフで顔面を切り裂かれた。

連絡を受けた私は電話やレンタカーで学友会の防衛隊を集め学校へ駆けつけた。しかし鉄扉であるし、一階の窓という窓は内側からロッカーでバリケードされていて簡単に解除できる状態ではなかった。ロッカーを外側から内側に倒すための作業をしていると二階以上から石や瓶を投げ落とされただけではなく、四階から石油を撒き放火したために四階まで火が上る状態となった。

研心館の南側は二階部分で渡り廊下のように図書館の書庫とつながっていた。渡り廊下の部分が「屋根」になるのでその下は、上からの投石が当たらない。そこに梯子をかけロッカーと天井までの隙間にあるベニヤ板部分を突き破って突入し侵入者を拘束した。大半は他大学の学

生であった。そのうちの一人は三菱重工の重役の息子であった。彼は後に三菱重工爆破事件に加わり逮捕されている。なお穀田君は窓から逃げる時に捻挫し診療所に運ばれたが、そこが襲撃される前に我々が到着し助かった。

#### 4月11日、ランチ事件

午後11時頃、夜食をとるために大卒付近の公道を通行中の学友会に結集する5人の学生が、待ち伏せていた「全共闘」十数名に鉄パイプ、チェーンなどで殴る蹴るの暴行を受けた。2人の学生が全治3週間の外傷を受け、さらに1人の学生が封鎖中の恒心館に拉致された。翌12日未明まで5時間にわたり監禁のうえ、裸体にし、頭から水をかぶせ、椅子に縛り

付け、ハサミで髪を刈り取り、鉄パイプでなぐり、たばこの火で火傷を負わせるなどの重傷を負わせた。

4月14日、経済・経営・理工学部・二部全学部が入学式を行った。これに対して入学式の会場となった以学館一号教室前に約70名のヘルメット姿の「全共闘」が「入学式粉砕」を叫んで押しかけたが、これを阻止する学友会の防衛隊ならびに一般学生に排除された。

4月21日、法学部、文学部、産業社会学部の合同入学式にも開始直前にヘルメット、鉄パイプで武装した「全共闘」約70名が「入学式粉砕」を叫び押し入ろうとしたが、学友会の素手の防衛隊や新入生を含む学生に排除された。

#### 5月14日、理工学部四号館封鎖と解除

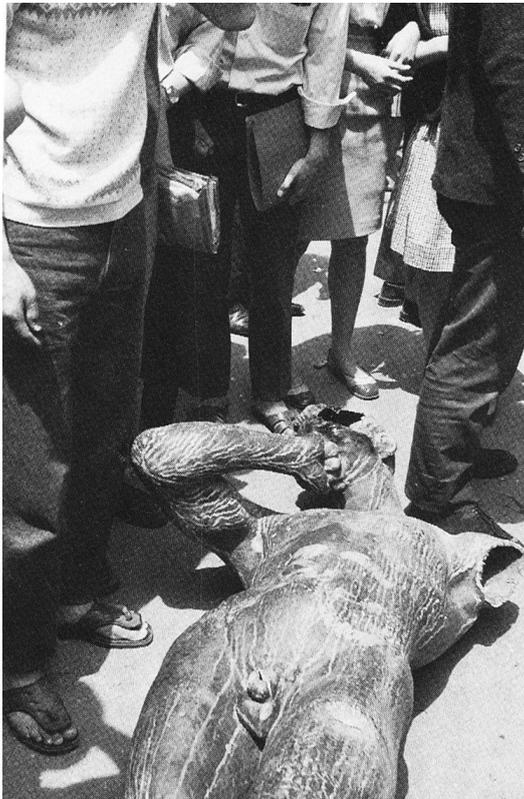
午前3時40分頃、約70名の全共闘が棍棒を持ち、衣笠の生物教室及び旧一号館理工学部自治会ボックスを破壊し、机、椅子を電気工学科の教室実験施設がある四号館の封鎖バリケード用に運ぶ。同時に体育館工事現場からも資材を運び込んで道路にバリケード作る。また以学館地下に武装して乱入し、自治会ボックスにいた学生に暴力をふるい、自治会ボックスに油を流して放火した。生協購買部からテープレコーダー、ラジオ、輪転機、カメラなどを盗む。

午前6時頃、以学館地下の自治会ボックスから6名が四号館に拉致され、その内3名は全身打撲の状態で解放されたが、他の3名は連れ出され午前7時過ぎに広小路の恒心館に連れ込まれた。うち1名がすでに頭部を負傷させられていた。

午後4時頃、電気工学科の学生を中心に理工学部の学生による封鎖解除行動が開始され4時半頃解除に成功。その時逃げ遅れた「全共闘」3名が糾弾集会の中で責任を追及される。午後6時過ぎ、大学立会いの下、午後9時40分ごろ恒心前で「捕虜交換」を行った。

#### 計画的だったわだつみ像の破壊

広小路キャンパスの研心館の東側



全共闘によって倒された「わだつみ像」(1969年5月20日、「立命館教職員組合40年の歩み」より)

に反戦平和のシンボルであるわだつみ像が設置されていた。この像が5月20日、「全共闘」によって破壊された。

5月20日、早朝、機動隊が恒心館強制捜査に入った。「全共闘」はなら抵抗することもなく退去した。しかしその後、二百数十名の「全共闘」がヘルメット・ゲバ棒姿で現れ機動隊に付き添われるようにして広小路キャンパスに侵入し、破壊行動を開始した。

そうこうしているうちに午前11時過ぎ彼らは「わだつみ像」にロープをかけて引き倒した。

われわれは設置してあった「民主化放送」の設備で「学友会はこれ以上の破壊は許すことができない」と宣言し「直ちに館外に出て暴力学生を排除する。キャンパスをとりまく学友もキャンパスの中にいる学友も共に協力をしてほしい」と繰り返し放送したうえで学友会防衛隊は研心館から一気に出た。

研心館二階から、学生たちにヘルメットを投げおろした。研心館から出た学友会防衛隊とヘルメットを受け取った学生で1000名を超える集団となり一気に「全共闘」を追い出した。そのころにはキャンパスは2000名を超える学生であふれた。

引き倒された「わだつみ像」は、腕をもぎ取られ、頭に大きな穴をあ

けられた上に、胸に赤いペンキで「死」と落書きされ横たわっていた。「わだつみ像」破壊は学生・教職員に大きな衝撃を与えた。それまでまだ多少は残っていた「全共闘」に対する幻想や思い入れを最終的に断ち切る決定的なきっかけとなった。社会的にも大きな衝撃をもたらした。像の制作者本郷新は「無知と暴力」と激しく怒った。

なお当時、像破壊を弁護する人達から「像破壊は意図したことではなく、偶発的なものである」という主張が出されていたが、私は事実と違うと言った。なぜなら像はコンクリート台座に固定して載せられたブロンズ製の大きなものであり、一人や二人で押し下りして倒せるものではなかった。首にロープをかけ数人で引つ張って倒したのである。ロープはあらかじめ用意されていた。また倒された像の胸には赤いペンキで「死」と書かれた。ペンキも用意していたのである。

### 「わだつみ像」の再建運動

わだつみ像が破壊された当日の夜、武藤守一立命館総長事務取扱は記者会見の中で「これは許しがたい暴挙である」と厳しく批判し「僕は直ちに修復もしくは再建にとりかかると言明した。

5月23日、五者共闘と大学の共催で「大学弾圧立法粉碎・わだつみ像

破壊抗議全立命集会」が開催され、4000名を超える学生・教職員の参加で広小路キャンパスが埋まった。集会には末川名誉総長も参加され、改めて像建立の歴史と意義を語り再建の決意を呼びかけられた。集会の第三議題となっていた「わだつみ像再建実行委員会の結成」が参加者の賛同の歓声の中で確認された。同日「大学立法粉碎、暴力集団一掃」全京都大学人・府市民集会在が7000名の参加で行われた。

その後さまざま経緯を経て、全国的な再建実行委員会が結成され、全国的に大きな支持と募金が寄せられた。1970年12月8日の不戦の集いには、破壊されたわだつみ像とともに、再建された新しいわだつみ像が披露された。二つの像を見ることによって2000名に及ぶ参加者は改めて像破壊を糾弾するとともに反戦平和に向けての取り組みを決意した。

### 小原君リンチ事件

5月21日、スクールバスで広小路に着いた小原輝三君を「全共闘」議長佐野二三雄らが見つけバスから引きずりおろし拉致し、暴行を加えた。その後小原君が府立病院救急室で治療を受けていたところを襲い、その場で暴行を加えるとともに、再び拉致し自動車で京大教養部に連れ込み暴行。重傷となった同君を車で

運び等持院付近に放置するという残酷な拷問リンチを行った。小原君は六月六日、佐野ら暴行に加わった者を告訴した。

### おわりに

紙幅の関係もあり、これで終了することにします。この原稿は、単行本「彼等を通すな」(仮題)の作成のための原稿ノートからの要約抜粋である。原稿ノートは大学紛争が終焉していく過程までを記し、私が京大や同志社、龍谷大学のたたかひともかかわったことも書いていますが、今回は省略した。

また「大学紛争」とかかわって、暴力学生たちに各政党がどのように対応していたかの問題がある。結論的に言えば自民党は「泳がせ政策」をとっていた。社会党は「勇敢な学生たち」と美化していた。唯一、明確に批判していたのは日本共産党であった。

これらは新たに執筆・出版する単行本を読んでいただきたい。

この連載が終わった段階で、連載原稿を小冊子にまとめるとともに独自のブログを立ち上げ、掲載する予定にしている。そして当時の関係者を中心に情報や資料の提供を受け多くの人の英知を結集して、上記の本を完成させる予定である。ご協力をお願いしたい。

(完)



# 悼

## 女性解放ひとすじに生きた 西垣昭子さんを偲ぶ (下)

井上とし (女性史研究者)

### 第四期 花ひらく国際婦人年

さらに、西垣の運動者としての特性を開花させたのは国際婦人年であった。

一九七五年、国連が初めて女性差別を人権問題であると捉え、国際婦人年を決定した。「世界行動計画」が策定され、目標である「平等・発展・平和」は全女性の希望のシンボルとなった。その達成には女性のあらゆる分野への参加、参画が必要であると宣言される。(この頃から「女性」の語が常用される)

七五年二月、京都市民主婦人連合会(民婦連)は「国際婦人年を実りあるものとして立ち上がろう」と、国際婦人年京都実行委員会(婦人年実行委)の呼びかけを府下全女性団体に発した。三月、九三団体(市連合婦人会のみ不参加)の賛同を得て、大きい統一の輪のなかで婦人年実行委を確認、結成された。一二の幹事団体を選出、目標に沿ってそれぞれの専門委員会の設定、年間行事、自

治体への協力要請などを決め、ただちに活動を開始する。代表に米沢美以子(府連合婦人会長)、事務局長に西垣が就いた。同年末、国際婦人年京都連絡会(婦人年連絡会)と名称を変え、活動の継続と年一回の全体集会開催(現在も続行)が取り決められた。西垣は引き続き事務局長を担当し、統一的大運動の要としての役割と能力発揮を全回転させる。

同年九月二八日、国際婦人年記念京都集会是、京都会場第一ホールに府下全域から三千人参加。記念講演・樋口恵子、各専門委員会の「世界大会への京都からの報告」、電光掲示板を使った全体討論会とアンケートはKBSテレビで放映された。

また、同年一二月五日からの平和委員会による「ヒロシマ・原爆の記録展」は被爆市民の描いた絵を展示。多くの機関の協力を得て朝日会館に延べ一万人の参加があり、市民に感動を与

えた。

婦人年連絡会には、歴史をもつ女性団体、労組女性部がほとんど集結しただけに、各分野の多彩な活動が「婦人の一〇年」をもさらに超えて長期に展開されていくが、目標を具体的施策として実現させるためには自治体に働きかけていかなければならない。府・市へ婦人行動計画策定を求め、申し入れをした。七七年、府は京都府婦人問題協議会を設置、三四の女性団体からの委員が一年半討議し、「提言」を提出するが、公表されないまま、別に婦人対策推進会議を作って編成替えされる。七八



「西垣昭子さんを偲ぶ集い」(2012年7月8日、聖護院御殿荘)

年知事選での革新候補敗退が政治情勢を変化させていた。

京都市では女性団体からなる京都市婦人会議が、自民党の初の女性市会議長就任という政治環境のもとで構成委員割当を巡って紛糾し、七九年に発足する。西垣はいずれにも新婦人副会長として参加している。同時に七八年には京都市婦人問題企画推進協議会が女性会長(久米弘子)、委員一四名中女性が半数という異例の編成で発足した。ここでは婦人会議とも連携しつつ女性の現状調査、数次に亘る市民懇談会、集会を行った。女性たちの関心は高く、久米会長は「あのときの婦人の熱意と期待は忘れることができません」と回想しているが、委員であった私も同様の高揚感を実感している。八〇年「京都市の婦人対策の基本的な考え方」答申」が提出され、八二年「京都市行動計画」(第一次)、続いて「京都市行動計画」が策定され、これまではなかった女性施策が進行していくことになった。

国連では七九年女性差別撤廃条約が採択されたが、日本でも早期に批准するように署名活動をし、府・市に請願している(八六年修正付「男女雇用機会均等法」施行)。他にも、七八年母子家庭対策の強化・医療費公費負担、八四年児童扶養手当の改悪反対などの請願活動があり、なかでも八三年優生保護法改悪反対の請

願行動は、全国的な広がりを見せ、婦人年連絡会から一〇名が上京して厚生省交渉をした。これらの請願は署名、集会などが同時に取り組まれ、またたえずニュースが発行され、その準備、総括も並行する。婦人年連絡会の幹事団体（一二団体）の熱心な参加と、事務局に山際和代（府職労）、大沢泰子（京教組）、高瀬久（同）ら多数の人材を擁していたが、なによりも西垣の八面六臂の活動の姿があった。国際婦人年の高揚は、世界

国、自治体の後押しがあったとはいえず、思想信条も目的も異なる幅の広い女性組織が結集し、さまざまな課題を協調して実行、実現していった。女性の統一の可能性を明示してみせた歴史的な女性運動であったといえるよう。

まさに花ひらく国際婦人年であり、五〇歳前後の花ひらく西垣昭子であった。

### 女性運動の「へそ」だった人

終わりにあたって、西垣の生涯を貫く言葉を搜すとしたら、女性解放ではないかと思う。

西垣の女性運動の主軸は、男性と同等の権利を有する人間であることと認めさせる——女がもっと生きやすくなるための闘いであったのではなからうか。女性解放という語は、とくに西垣が活動を始めた戦後はよく使われ、それ自体で歴史的な女性

差別、抑圧からの解放熱望、秘めた怨念さえ含むスローガンである。それは、今も達成されていない。

西垣の生涯は、私生活も含めて平穩とはいいたくないであろう。さまざまな批判にもさらされてきた。それでも西垣はたゆまず、明るかった。西垣の性格の大きい特色は放胆。庶民的な人情味を保持しつつ、女性には珍しく情緒やこだわりを容易に放棄し、大胆な発想と行動がとれる。そのため、野放図とも受けとられるが、この放胆さが困難な運動を牽引していったのではないか。もちろん京都には女性活動者たちの厚い層があつて運動が結実してきたのはいうまでもないが、ある人が西垣を「女性運動の『へそ』だった人」といった。まさしく「へそ」として運動を牽引し続けたといえるのであろう。

かつて、西垣には先輩に当たる戦前からの婦人活動家・城ゆきは「運動の人生は面白かった。生き方に悔いはない。昔を振り返って、苦労なんて思わない。毎日が楽しくて仕方なかった」と語っていた。西垣もまた、多くの苦難と涙と汗の努力をともないながらであつても、「女性運動は面白かった」、そのようにいえる人生を生きたと思えてならない。

西垣昭子さんのご冥福を祈るとともに、時代の変わり目を迎えた現在、新しい西垣昭子の再来を期待したい。



**市原野住民運動の記録**  
京都市東北部清掃工場建設をめぐって

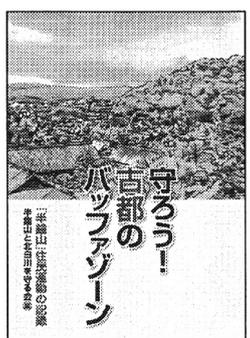
91年5月に清掃工場建設が発表されて以来、昨年9月の「談合事件弁護士報酬請求訴訟」最高裁判決まで20年に及ぶ地元住

## BOOK 左京の「住民運動の記録」2冊

**守ろう！古都のバッファゾーン**

「半鐘山」住民運動の記録

世界遺産・銀閣寺のバッファゾーン（緩衝地帯）内にある半鐘山の宅地開発を8年8ヶ月に



### 開発縮小で貴重な緑地を守る

及ぶ反対運動で大幅に縮小させ、緑地を守りぬいた感動的な記録。住民と弁護士がユネスコ世界遺産センターを訪れ危機勧告を要請し、日本政府に書簡を出させ、国土問題研究所など専門家が裁判所で地質上の危険性を指摘、工事差し止め仮処分が決定された。

文化庁や京都市の世界遺産継承への認識の低さと、住民の環境を守る意識の高さがくっきりと浮き彫りになる本である。（半鐘山と北白川を守る会・編、つむぎ出版・本体1429円）

### 科学的論拠と広範な住民の団結

民および、ごみ裁判をすすめる会の活動をふりかえったもの。科学的論拠にもとづき、広範な住民の団結を築いた運動は教訓的だ。ごみ行政のあり方、公共事業の進め方など多岐にわたる問題を京都市に問いかけ、並行して自主的なごみ減量・リサイクルの取り組みもすすめた。

結果的に建設は強行されたが、厳格な「公害防止協定」を締結させ操業の安全を確保し、「談合事件」での川崎重工からの損害賠償、京都市への弁護士報酬請求を最高裁までたたかって勝訴した記録である。（市原野ごみ裁判をすすめる会刊、非売品）

# 会員消息



札幌出身の棧敷よし子  
京都時代を知りたい

岸 伸子（北海道美瑛町）

岩井先生のご講演を録音で拝聴する機会をいただき感謝します。先生のますます意気盛んな探究心にただただ敬服し、ご健康を祈念するところです。テープのお願いをした一つの理由に、私が晩年に交流をえた札幌出身の棧敷（さんじき）よし子さんの地下活動で関わった京都の1930年代を知りたかったからです。先生の講演に登場する久野収は学生時代に棧敷に出会って、刑事が「アイヌの棧敷・ジョセフィン」と話したと書き残しています。クリスチヤンの父親（三重県出身）が名付けた

戸籍名でした。母親は福岡県出身です。棧敷さんの戦後日本の活動地、大阪では「アイヌの棧敷」と思っていた人が近年までおられたようで驚きです。

入院なしの1年

井上吉郎（北区）

2012年は、病に倒れてから初めて、入院することがない年でした。外国にも行けましたし、シャワーがひとりで浴びられるようになりました。胃ろう生活にも慣れて、滑舌もよくなりました。「猛々しい日本に待ったを！」の運動にも連なることができました。

〔福祉広場〕編集長

戦後リベラルの否定に暗然

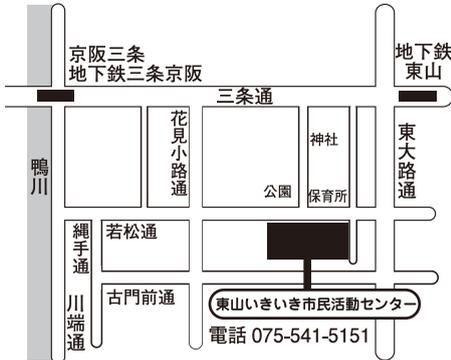
西井弘和（豊中市）

それにしても、エライ右翼的、保守的な政権が圧倒的な支持を得て誕生しました。第3極というのもそうですね。

## 民主運動史を語る会 1月例会

とき 1月31日(木) 午後2時～4時半  
ところ 東山いきいき市民活動センター会議室  
花見小路通古門前上る東入る南側  
テーマ 日本最初の原子炉建設を反対運動で阻止した宇治の闘い  
語る人 玉井和次さん(六地藏・木幡九条の会)

1957年、宇治に京大原子炉実験所が建設される計画に住民はこぞって反対し勝利した。56年前、国会で茶生産業者が感動の陳述。



例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。

戦争をしに行くとか核を持つべきだとか輪転機をぐるぐる回してお札を刷る……なんていつてる。

彼らはぼくらの子どもの世代だと思うのですが、その親のぼくらの青春の頃は、戦後から1950～60年代、戦後責任を担うものとして、反戦、反核、民主、護憲などが、戦後リベラルたるものの方の共通意識ではなかったのでしょうか。

今それらがみな無惨に否定されようとしている。それが日本の大勢となっているように思える。50年経って時代は変わったといっても、ぼくらは何を次の世代に伝えたのだろうか、絶望的な思いで暗然とせざるを得ないのです。

## 情報 スクラップ



「京都子どもを守る会」60周年

京都子どもを守る会（早川幸生会長）は11月18日、結成60周年を祝うつどいを京都教育文化センターで開き80人が参加。正木健雄・日本子どもを守る会会長が「こんな長に長く、元気に活躍しているのは世界の奇跡」とあいさつ、結成以来活動してきた関谷美奈子前事務局長に感謝状と花束が贈られた。

いま、京都の空襲被害を語る

2月3日に市民公開講座

京都平和遺族会は2月3日(日)午前9時50分から正午まで、市職員会館かがわで東山・馬町、西陣、舞鶴の空襲被害を語る講座を開く。馬町爆撃を語り継ぐ会の酒谷義郎さん、西陣・平和の鐘をつく会の古武博司さん、舞鶴空襲編纂委員会の関本長三郎さんらが、京都にもあった悲惨な空襲被害の

実態を報告する。入場無料。連絡先 077116211263（大坪）

「真田は著作集」全5巻を発行

総合社会福祉研究所（大阪市）は同研究所を創立した真田是氏（元立命館副総長、2005年没）の著作集を刊行、普及に努めている。教えを受けた研究者らが編集、各巻ごと、テーマごとに解題を付け、真田理論の真髓を学べるようになっていく。5巻セット箱入りで3月末までは1万2千円。☎06-6779-4894

## 催し案内

立命館大学国際平和ミュージアム企画展「ウラジオストクにおける日露民衆交流の歴史と現在―シベリア出兵―」との関わりも含めて 1月12日～2月3日。『京都青春時代―学生と戦争の風景―』2月9日～3月24日

## 編集後記



▼あけましておめでとうございます。今号も16頁で発行しました。できれば毎号20頁建てで編集したいと思っています。一面の岩井代表のあいさつにあるように、歴史や伝統をどう学び次世代に伝えていくのか、「燎原」の役割がますます重要になってきているようです。

▼とは言え会員の高齢化が進み、入会より退会する人の方が多い状況が続いてきました。しかし同時に「燎原」をまだ読んだことのない人が多いのも事実。いっそう魅力ある誌面作りを努力しますので、新会員の紹介にご協力ください。

（湯浅俊彦）

## 京都教職員組合

執行委員長 川口隆洋

京都市左京区聖護院川原町 4-13 京都府教育会館内

☎075-752-0011 FAX075-751-1091

## 京都市教職員組合協議会

京都市左京区聖護院川原町 4-13 京都府教育会館内

☎075 (771) 9171 FAX075 (751) 0851

## 京都市職員労働組合

中央執行委員長 小林竜雄

〒604-8571 京都市中京区河原町御地  
電話 075-222-3883 FAX075-222-3893

## (社)部落問題研究所

〒606-8691 京都市左京区高野西開町 34-11

☎075-721-6108 FAX075-701-2723

## 京都民主医療機関連合会

京都市右京区西院久田町 9  
建設会館 5 F

## 京都民医連中央病院

〒604-8453 京都市中京区西ノ京春日町 16-1

☎075 (822) 2777

<http://kyoto-min-iren-c-hp.jp/>

社団法人 信 和 会

## 京都民医連第二中央病院

京都市左京区田中飛鳥井町 89

☎075-701-6111

URL<http://park12.wakwak.com/~kyoto2hp/>

## 京都自治体労働組合総連合

執行委員長 池田 豊

京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラポール京都 5F

〒604-8854 電話 075-801-8186 FAX075-801-3482

## 福祉保育労働組合京都地方本部

執行委員長 前田鉄雄

京都市上京区竹垣町通千本東大主税町 1100.1

京都福祉保育総合センター内

☎075-813-4800 FAX075-822-6220

## 日本国民救援会京都府本部

京都市中京区壬生仙念町 30-2 ラポール京都 5階

〒604-8854 電話 075-801-3915 FAX075-822-6632

## 宇治山宣会

会長 藪田秀雄

〒611-0033 宇治市大久保町北の山 11-1 藪田秀雄気付

TEL0774-48-2472

## 市民共同法律事務所

京都市中京区鳥丸通二条下ル西側ヒロセビル 2階

TEL075 (256) 3320

## 京都第一法律事務所

京都市中京区鳥丸通二条上る蒔絵屋町 280 番地

マニュアルプレイス京都ビル 4階

TEL (075) 211-4411

FAX (075) 255-2507

弁護士 秋山健司 弁護士 大河原壽貴 弁護士 藤澤真美  
弁護士 浅野則明 弁護士 大島麻子 弁護士 村山 晃  
弁護士 荒川英幸 弁護士 奥村一彦 弁護士 森川 明  
弁護士 飯田 昭 弁護士 谷 文彰 弁護士 渡辺 馨  
弁護士 糸瀬美保 弁護士 寺本憲治 弁護士 渡辺輝人  
弁護士 岩橋多恵 弁護士 藤井 豊

'13  
明けましておめでとうござります

元旦

## 知は力、本のことならおまかせください。

京都唯一の民主書店です

ブックセンター **本の風**

☎075 (415) 7902  
FAX (415) 7900

今年も話題の本をお届けします

株式会社 **かもがわ出版**

☎075 (432) 2868  
FAX (432) 2869

心に伝わる本づくり、自費出版の相談は

株式会社 **ウインかもがわ**

☎075 (432) 3455  
FAX (432) 2869